

1/31 門出かやぶきの里  
3mの雪に覆われた  
おやけ棟正面

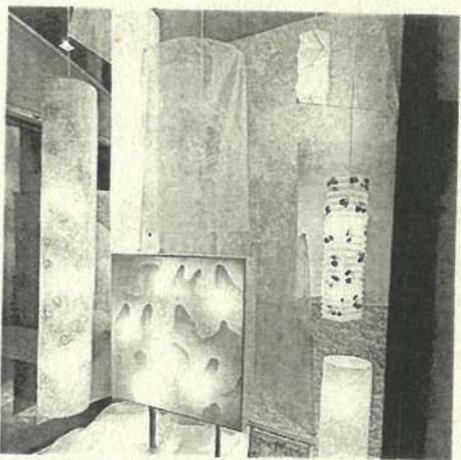
### 睦月

朝、五時半に女房は起き、六時半になると「ご飯よ」と声がかかり、ベッドから転げ落ちるとそこがコタツ、食べながら今日の予定など話し、さてさてと立ち上がる時、決まって腰に痛みが走る。「よいしよ」と無意識に声が出る老人になったが女房まで真似をする。しかしながら、ありがたいことにしばらくして動き始めるとそれなりになつて今日も元気に雪掘りだ。正月、積雪が五〇センチほどで新年を迎えたのですが、八日には一メートルを超えて襖の開き具合に抵抗がある。積雪が一、五メートルになると完全に襖は開かない。生前、父がほぼ寝たきりになった時(外を見なくとも)襖の知らせで「お前、雪掘れや」と襖が掘り時を知らせてくれるのです。

村は空き家がどんどん増えて自分が守らなければならぬ家が一〇棟を超えて、二月八日までの一カ月間、よくもまあ飽きずに雪が降り続けたものです。従ってほぼ連日、雪を掘り続けました。五、六年前、ぎっくり腰で酷い目にあつてから学習して、先ずは中腰を避ける、明日も続けられるように決して無理はしない。体力が衰えだした還暦の頃から時々休むようにしたら手の平に積もる新しい雪の精(結晶)も楽しむようになった。寒いときの粉雪の何とも美しく、細く長くあつという間に消えていく妖精、また休むことで雪と相談しながら学習して、スコップの刺しとして、その量、突き刺す角度などに移動させるか、そもそもどこから始めればよいかわかれば安全か、若い時より仕事率は上がり、ようやく雪掘りを覚えようです。その内「雪掘り術」の本を出してもいいくらい。雪掘りは辛さも楽しさも人の覚悟も気づかしてくる、精神修行にはもつてこい。一時無心にしてくれる気持ちよさがあります。今冬の積雪量は三メートルで四メートルを数回経験しているのです。さほどではないにしろ、一月末の寒波は自然落下式(雪止め金具を付けない)屋根の雪が通常より早く落ちるはずが凍り付いて、そのまま二メートル程の雪量で屋根にいつ落下するか分からないので(上がることもできず、先端部が折れてしまう雪害がとて多かつた。

# 高志の生紙屋

第62号  
2026年4月14日発行  
越後 門出和紙 小林康生  
〒945-1513 新潟県柏崎市高柳町門出  
☎0257(41)2361 0257(41)3024  
e-mail info@kadoidewashi.com  
http://www.kadoidewashi.com  
年4回発行 購読料 1500円



4/10 高柳町じよんのび村入り口に  
飾り付けられた「じよんのびの和明かり」

我が家も親戚の小川さんより譲り受けた黒姫山の中腹、板畑集落にある「小川山荘」は、かやぶき屋根にトタンを被せてあるのですが、曲がり屋の中門、トタン屋根に本屋の凍り付いた雪の塊が直撃したらしく、一尺角の横柱を見事に折つて大きく凹んでしまった。



2/13 「小川山荘」谷間を降りた先が門出、ブルドーザーで除雪後、正面(写真裏側)中門が壊れた

小川さんの姪である紀久子とここで初めて会った縁ある家です。今冬、この板畑の住民は八十五歳になるご夫妻だけの集落を守つておられる。小川山荘の眺望は抜群で右遠方に苗場山、左は谷川岳、その手前が芝峠温泉そして足元のV字型の谷間は時折、雲海になり、我が家のゲストハウスで空気が違ってとてもよかつたのですが、いよいよ覚悟を決める時が迫っているようです。

**お知いせ**  
**☆高志の生紙工房**  
**生紙市** 4月25日(土)~5月6日(水)  
 am9:00~pm17:00 \*全商品 10%OFF  
 「生紙を語る」小林康生  
 4/25・5/2・5/3 pm14:00~15:00  
**☆「かみわさききの家」**  
 4月25日~営業開始 am10:00~pm16:00  
 毎週土曜日、日曜日  
 \*G・W 5/2・5/3・5/4・5/5は営業  
 \*平日にご希望の方はご連絡下さい

### 如月

二月十七日、イギリスからシアン・ポーエンさんがやつてきた。彼女がこれから宿泊する工房「かみわさききの家」の二階窓は屋根と地上が二メートルの雪に覆われてくついていたので、先ずは前日に窓だけは開けた。家に入るのも道路から雪の階段を登り、そしてまた雪の階段を降りて玄関を開ける生活の始まりです。冬の紙づくり、「雪さらし」や雪中に紙床を埋める「かんぐれ」などを調査研究してまとめたという。カナダのトロンントに住んでおられる紙布作家の軽野裕子さんの紹介で細かなことも何も知らず、いつものようにどうぞ、どうぞとお出でいただいたの

ですが、話を聞いてみるとビックリ。彼女はリザベス女王の遺産で伝統的な手作り仕事の調査や研究する人に二年間の奨学金が付与される、英国で五百人の応募の中から八名が選ばれ、日本には他に金継ぎなど三名が来られるという。名譽ある研究テーマに我が工房もお手伝いできることはありがたいことです。

彼女はロンドンとスコットランドの北の小さな島で暮らしていて、そこは冬になると時速一〇〇キロメートルの風が...立ち木も育たない寒村でじつと春を待つのだという。従つて我が越後と同じく冬の手仕事も盛んで羊の毛で編み込んだ、小生にはもつたない上等なマフラーをいただいた。

2/21 早朝、雪原を凍み渡りと  
楮皮の雪晒しをする  
シアンさん



彼女は日々そばに迫る自然とそこに生きる人々、自然が宿らせる技、波や風の音と共に暮らせる喜びや苦しみを知っている。アーティストであり教育者でした。彼女が宿泊している工房の入り口には「わらぼうし」(雪の日にマント代わりに被るわら細工)がぶら下がっていて、それは四十年ほど前、この門出でたった一人ジャンヒゲという細長く伸びた草で編んでいた新屋敷のおじいさんに作ってもらったものでそれが最後のモノでした。内側は細く編み込んである優れもので感動して注文したモノ。彼女もすっかりそれに感動して和紙で再現してみたいという。偶然にも彼女が来てから晴天が続き、雪さらしから木灰煮、紙叩き、紙漉き、寒ぐれ、板干、天日乾燥まで一通りの目的を果たし、三



4/10 紙原料や紙床を雪室に...  
銀シートで覆う

月十三日に帰国された。また次の冬にやってくる。

### 弥生

三月二十日、女房の古希の祝いとかで四人の子どもたちが我々二人をじよんのび村でご馳走してくれるという。こういう非日常はお互いちよつと照れ臭いものだ。

じよんのび村は自分たちが若い時の地域おこしがきっかけでもう三十年前になるがオープンした施設。しかし、あまりに近いで泊まるのはたしか今回が二回目です。(ちなみに女房は初めて)レストラン銀兵衛でイタリアンのフルコースをいただく。普段は飲めない自分ですがワインを少々...。一番下の息子も就職して、ようやくよくよく肩の荷が下りた。しばし、至福の時に浸つた。その、じよんのび村の社長さんから和紙の宿に少しずつ整えていきたいという希望で、一昨年より始動した「かみわさききの家」の若手メンバーが準備して制作したもので飾り付ける。まだまだ試行錯誤の展示ですが、今回は正面玄関の入り口に「じよんのび和あかり」を四メートルの吹き抜けに様々な明かりをふわふわした雪ぼうし(薄紙)吊るした。いつも見慣れている場所でトラブルがあつてもすぐ駆けつけて直せるので...。少し冒険をしております。



2/10 倒れそうなアカシデの  
枝に雪の塊

雪郷に住む人々の一番のご馳走はブナの新しい緑に出会うことです。今年はず早く四月に入ると同時に始まり残雪の白にその希望の翠が映えて眩しい。それにしても、生紙工房の斜面四十五度に傾いた大きなアカシデの枝に寒波で凍り付いた雪のかたまりが一ヶ月も落ちずそのうち土砂ごと下の川に落ちるのではと心配していたが赤い芽が開き始めている。七十二回目の新しい春、この陽射しを木々たちと共に生きて愛でている、今ある命がとても愛おしい。一週間もすればあずき色の若葉が出てその後、眩しい緑に変わっていくのだ。さてさて、春は忙しい。夏小屋を作る場所の雪を突ついで紙床を保管するための雪室には銀シートを覆わなければ消えてしまう。 康生